

---

# ルカとレイのたびにつき

\*れに\*

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ルカとレイのたびにつき

### 【Nコード】

N2948Q

### 【作者名】

\*れに\*

### 【あらすじ】

ルカとレイという子が、二人であちこち旅します。旅先からの「たびにつき」とゆうようになってます。徐々にあかされる二人の過去。

そして、旅の果てにまっっている未来は・・・

## 主人公たち紹介

名前：ルカ・アークファルト

年齢：13歳

種族：魔族の血をひいているであろう人間

容姿：栗色の髪に薄茶色の眼

髪の長さは肩くらい

身長160センチくらい

基本パーカーにジーンズとゆういでたちである

性格：幼いころの傷を背負って生きているためか、どこか冷めたところがある

だが、ふとした時にやわらかい笑みがこぼれる・・・そんな人

もう一人の主人公もおるですよ！

名前：レイ・ディーネ

年齢：13歳

種族：ヴァンパイアの血を引く人間

容姿：星屑のような銀髪に薄い赤色の眼

身長140センチくらい

基本綿のシャツに上着、ハーフパンツである

性格：天真爛漫ではあるが、どこか暗いところを見ている

自分の過去を絶対に明かさない

ルカにいつも「ちび」と言われるので最近毎日牛乳を飲んで  
いる

と、まあ、主人公の紹介です。

ルカとレイが色んなところを旅します。

そこからにつきっぱく書いていく予定です。

よろしくお願ひします！

## 旅路1 『ルカ』

「ねえ、ルカっ！ルカってばあ！聞いてる？」

あ……。

「って、こらっ！何度言ったら分かるんだ？水ノ剣には触るなって何度も言っているだろう？おまえにそれ相応の魔力がなかったら、今頃水に吹っ飛ばされてるぞ……。」

「だってルカがあたしの話聞いてないからじゃないっ！ちゃんと聞いててよっ！」

「たく……。こいつが同い年だとはとても思えない。

しかもそんな奴と旅をしているということも……。などと考えごとをしていたら、またもや現実に引き戻された。

「ほらあ！聞いてないじゃんっ！」

「ごめんごめんっ。それで？なんだっただ？」

「この先には、国があるのよね？」

「ああ。それがどうかしたのか？」

「それなのに人っ子一人見かけないってどういことよっ！？もう少しでついてもいいくらいなのに……。」

「言われてみればその通りだ。10日前に前の国を出たから……。あと1日2日で着けるはずだ。なのに、なぜ……？」



この笑顔が俺がこいつと旅している大きな理由だ……。

立ち上がった俺が周りを見渡すともうすでに薄暗い。冬の近づくこの時期、朝夕の冷え込みが激しい上に、日も短い。早く夜営をする場所を探さなくては……。

「ルカ？もう大丈夫だよ？はやくいかないと日が暮れちゃう。」

……。だれのせいだと思っている……。

「そうだな。もう行こう。」

しばらく歩くと川が近くに見える場所に出た。

## 旅路1 『ルカ』 (後書き)

えっと、ルカ&レイ初書きです。

次の国に着くまではルカ目線で書いていこうと思ってます



## 旅路2 『ルカ』

うん、ここならいいだろう。

川もあるから飲み水を補給していこう。

いくら魔族とヴァンパイアの血をひいているからって、人間に近くなっているから人並みに喉も渇くし、腹も減る。

「レイ、今日はここで寝るぞ。」

「うん、わかったよっ」

そう言っつてレイは晩飯の準備をはじめ。

その間に、薪でも拾っておくか……。

パチパチと木の燃える音がする。

基本的に火には困らない。レイが魔法で出してくれる。

だが、水は……。水ノ剣は水を出せるが戦闘用だ。飲み水に使うわけにはいかない。

「ルカ、もうそろそろだよね？」

「ああ。」

俺は熱さをそんなに感じない。レイも同様……。のはずなのだが。火からなにかを取り出すのはいつも俺の役目だ。手が黒くなるのであまり好きではない……。

俺は薪をまずよけると、レイに一旦火を消してもらおう。

そうして地中に埋めておいた葉の包みを、そうっと取り出してレイに手渡す。

「上手くできてるかなあ？ね、ルカ。」

「大丈夫だろ。いつもとそんなに変わりはないぞ。」

「ならよかったっ！！」

包みを開く前に、俺が薪から水を吸い取って、水ノ剣にチャージしてやる。

そうして乾いた薪にレイが火をつける。

「ん・・・あったかい。ありがとう、レイ。」

「うんっ」

「食べるか・・・。」

そうっと包みを開くと、ほわっと香ばしい匂いとともに湯気が立ち上る。

「いい匂いっ！おいしそうっ！ねえルカっ、はやく食べようよ。」

「うん。」

包みの中には米の飯と、タレに漬け込んだ鹿肉が入っている。鹿肉は前の国で手に入れた。タレに漬け込んだ鹿肉は腐りにくく、味も良いから旅人の食料として重宝されている。

「いったただつきまーすっ！はもはも……。ん~~~~っ！おいしいっ！はもはも……。」

レイは夢中で食べている。

俺も一口……。

「うん、美味い。レイは料理上手だよな……。」

一口食べると甘辛いタレに漬け込んだ鹿肉がやわらかく、口の中でほろほろとくずれる。

ふっくらと炊き上がった米の飯に、甘辛いタレがしみこんで本当に美味しい。

「美味しい……。」

「ねっ？おいしいよねっ？はもはも……。ん~~~~っ！」

またレイはすごく美味しそうに食べた。

月が綺麗だ。

旅路2 『ルカ』 (後書き)

えっと・・・。美味しいものを書くのが好きなので、ご飯にめっちや時間かけてしまいましたw

### 旅路3 『ルカ』

今夜は満月だ。

レイの星屑色の髪がきらきらと輝いている。

つたく。のんきに寝やがって……。

夜は交代で火の番をする。獣が襲ってくる可能性もあるからだ。襲ってきても返り討ちにできるが、俺は過去の経験から、レイはなぜかわからないが、何の罪もない生き物を殺すのが嫌いなのだ。

こいつは絶対に自分の過去を教えない。前にレイの持っている光と闇の剣について尋ねたときも、笑ってはぐらかされてしまった。

それに……。こいつは天真爛漫な奴だが、どこかこの世の暗いところを見ている部分がある。過去になにがあつたのだろう……。？銀髪に薄赤い眼、それに戦ったり夜になったりすると眼の色が真紅になるからヴァンパイアの血を引いていることは確かなのだが。

あと分かっていることといえば、「レイ・ディーネ」という名前、「光と闇の双剣」の使い手であるということ、火に関する魔法が使えるという事、それに……。料理上手……。このくらいか。自分がヴァンパイアの血を引いているということもまだ言ってくれていない。無理に知りたいとも思わないが、それで変に傷つけたくもない。

パチパチと木の燃える音。俺が一番落ち着く音。あの幸せだった頃を思い出させてくれる音……。

アーク。俺に水ノ剣と旅の知識、そして心を与えてくれた。毎日、

あなたに感謝している。

あなたの事を思い出した時に、あなたはもうこの世にはいない、もう二度と会えないという思いで胸が張り裂けそうになる。

あなたと別れてから、また心を失くしていた俺に、再び心を与えてくれたのはレイだった。これはアーク、あなたがめぐり合わせてくれたのだろうか……？

月が、星が動いている。もうそろそろ交代の時間だ。

こんなに幸せそうに眠っているこいつを起こすのは少々気が引けるが……。

「レイ、レイ、起きろ。交代の時間だ……。」

旅路3 『ルカ』 (後書き)

ちよっとしんみりルカですね……。レイの過去とは……。？

## 旅路4 『ルカ』

ん・・・？

もう朝か。川の水面に反射する朝日がまぶしい。誰かが川の中に鏡を割って、投げ入れでもしたようだ・・・。

などと考えていたら・・・

「おはよっ、ルカ！もう朝だよっ！朝ごはん、できてるよ。」

そう言っってレイが手渡してきたのは、米の握り飯だ。米粒の一つ一つがツツツと輝いている。

「美味そう・・・だな。」

俺がレイを見上げるとレイはにこにここと微笑んでいる。平和な朝だ。

「いただきます。」

握り飯にかぶりつくと、程よく塩がきいていて、とても美味しい。食べ進めると、昨夜の鹿肉の残りが中に入っている。朝から重いようにも思えるが、鹿肉のタレに混ぜてあるハクリという甘酸っぱい果実のおかげでさっぱりしてて・・・。

「美味しいよ。美味しい・・・。」

「でしょっ？おいしいよねっ？ハクリがこの辺りにいっぱいになっ



てたのっ！いっぱいあるよ。食べて、食べてっ……」

と言って、レイはいくつも握り飯を出してきた。

……っっておいっ！いくら俺でもこんなにたくさんは……。

とは、レイのこの笑顔に言えるわけもなく。

仕方なく、食べ続ける。

が、全部食えるわけもなく。

「レイ、たくさん作ってくれてありがたいんだが、俺は全部は食いきれない……。だっ、だからな、弁当にしよう、弁当に……。」

「うん、そうだね。ちょっと作りすぎたかなって思ったんだけど……。やっぱり食べ切れなかったかっ」

ちょっと作りすぎたって……。ちょっとどころじゃないだろ、この量は。

レイが残った握り飯をハクリの葉で包む。

焚き火のあとを片付けて……。水を補給して……。荷物をまとめて……。

「レイ、行くかっ！」

旅路4 『ルカ』 (後書き)

今日か明日には、次の国に着けるでしょう(笑)

## 旅路5 『ルカ』

喉が渴く。いくら冬に近いといっても、歩けば熱くなる。休憩しているときは肌寒いくらいだが。

俺はいつものパーカーにジーンズ、それに薄手のレーシという上着を着ている。

レイはこれまたいつもの綿のシャツに上着、ハーフパンツだが、脚は寒くないのだろうか？

「ね、ルカ？ 今日には次の国に着けるよね？」

「ああ。太陽がああ位置だから・・・。」

俺は地図と太陽の位置から、今自分たちのいる場所を考える。

「このままなにもなければ、あと3エセット（約3時間）くらいで着くだろう。今夜は夜営する場所を探さなくてもよさそうだ。うまくいけば暖かい寝具で寝られる。」

「いやったあつ！！久しぶりだねっ、それにロコ（風呂）にも入れるよね」

「ああ、そうだな。」

しばらく他愛もない話をしながら半エセット（約30分）ほど歩いたところで、レイがもう待ちきれないと言っようじた

「ねえ、ルカ、お腹すかない？ もうお昼にしようよっ！」

と言い出した。そういえば、腹が減っている。

「しかたない。弁当食おうか。」

「うんっ」

そう言うと、荷物の中から握り飯の入ったハクリの包みを取り出して、美味そうに握り飯をほおばる。

見ているこっちまで食べたくなるじゃないか……。

「いちそうさま。」

「いちそうさまっ おいしかったね。」

「うん。美味かった……。よし、行くか。今から出れば、あと2と半エセット（約2時間半）もあれば着くだろう。」

「そっか、行こうかつ！」

歩く事2と半エセット……。ようやく何人かの人とすれ違っようになっっていた。

が、どの人もこのあたりの地域の人ではない。ある人は褐色の肌に薄茶色の目、それに茶髪だ。ある人は真っ白な肌に緑の瞳、それに金髪。

「ねえ、ルカ。今から行く国は商業で栄えてるって聞いたから、他の地域の人がいって当然よね。なのにここいらへんの人を全然見かけ

ない……。」

それは俺もおかしいと思う。商業で栄えているのなら、売りに来る人がいるのは当然だ。だが……。売りに行く人がなぜいない？

そんなことを考えながら歩いていたら、ふいに人々のざわめきが聞こえた。

「声が……。する。でも、人の声だけじゃなさそうよ……。」

レイには「聞き耳の才」がある。それは人には見ることのできない妖精、精霊、幽霊、時には獣の声も聞くことができる。この才は、ヴァンパイアの血を引くこいつだからこそその才だ。

「なんの声か、分かるか？」

「うん。まだそこまでは。でも、何かを、誰かに伝えたがってる……。」

「そうか。一旦聞き耳は閉じておけ。街に入ったときに、何がなんだか、分からなくなる。」

「うん、そうする……。」

と、人々のざわめきが大きくなった。

## 旅路5『ルカ』（後書き）

次からはレイ目線でいきます。

なるべく毎日更新したいですが、学校がある日は……。無理かもです。

## 商業の国 ラーハン1『レイ』

なに、ここ……。

人の声に混じって、なにか得体の知れないモノの音がする。

ルカに言われて、今は聞き耳を閉じているけど……。

そんなことを考えながら歩いていると、広場のようなところに出た。円い、大きな広場の真ん中には噴水があつて、その周りに色とりどりの異国の店が軒を連ねている。

「ルカっ、あのお店に入ってみよう！可愛い装飾品がいっぱいだよっ。」

「ああ、いいだろ。」

店の中は冷たい風が吹く外とは違って、人の熱気で暖かい。

「あつたかい……。」

思わず呟くと、ルカが、

「あそこに火鉢のようなものがある。あれで暖をとっているんじゃないか？」

と言った。

しばらく店の中を見ていると、ぱっと眼に留まる一着の着物があつ

た。

「これきれいっ！」

その着物は深い海のような瑠璃色から、夏の朝の抜けるような空の色まで、様々な青い糸で織つてある布で作られていた。ワンピースのような形だ。

襟の部分には、決して派手ではないがルーシエ（3〜4mmほどの中心部分に穴が開いた色ガラス）が縫い付けてあり、窓から入ってくる微かな光に反射してきらきらと輝いている。

きれい……。

「ねえ、ル……。」

「すみません、この着物いくらですか？」

「って、ルカっ！なに買う気になってんのよ！まだ買つって決めたわけじゃ……。」

「おまえの眼がああなったら、もう買うまで離れないだろうっ？」

「う……、そうかもしれないけど……。」

そうこうしているうちに、店の女主人がやってきた。

「はい、なにか御用でしょうか？」

そういった女主人は、よく日に焼けた顔に、くるくると良く動く茶色の眼、愛想のよさそうな口元。



とても人のよさそうな人だ。

「あの、この着物はいくらでしょうっ？」

全く、ルカってば……。

「良い着物に目をつけられましたね。この着物はトカラ産なんですよ。ほら、いかにも海って感じの色合いですよう？今なら2カロン（約2000円）にしておきますよ。」

「うん、悪くない。レイ、買うか。」

「え……、いいの？」

「ああ、おまえにはいつも世話になってる。それにその服。洗い代えも入れて、いつから着ている？もうそろそろ、新しいのを買ってもいいだろう。」

「やったあっ！嬉しいっ、嬉しいよっ！ありがとう、ルカっ」

「ああ。」

あたしは、早速買った着物と、まだ新しい白い内側に着る着物、それに女主人が「これも持ってっていいわよ」と言ってくれた、毛皮の暖かい靴に着替えた。

「ルカ、どうかなっ？」

「ああ、いいんじゃないか？その青、綺麗だな……。」

「でしょっ  
」

あたしはにっ  
と微笑み返すと、  
軽い足取りで次の店へと向かった。

商業の国 ラーハン1『レイ』（後書き）

レイ目線です。難しい・・・。

地の文と、話してることの口調が違うのは、これからの話で分かる  
と思われませう（笑）

## 商業の国 ラーハン2 『レイ』

ああ〜っ！ 楽しかったっ！ ラーハンには色々な国の店がある。  
あのあと買い物はしていないけど、店を覗くだけでもあたしは十分楽しかった。

「ルカ、あのお店に行ってみよっ！」

「ああ、いいよ。」

そのお店は、白と黒のを基調にした落ち着いた雰囲気、なぜか心がふっ……と和んだ。

「いらっしやいつ。なにかっ、気に入ったものはっ、あるかいっ？」

その奇妙な抑揚のついた話し方を聞いたとたん、あたしの脳裏に昔の記憶が鮮明によみがえった。

心ノ蔵がどくどくと波打っている。

なんで？なんでこの国の人がここに居るの……？な……ん……で……？

そのままあたしは暗い、果てしない闇に吸い込まれていった。

ん……、眩しい……。

ここは……？

眼を開けると目の前にルカの顔があった。

「やっと気がついたか。」

ルカの薄茶色の綺麗な眼が、あたしを見ている。

「あたし……、なんでここに……?」

「覚えてないのか。ったく。心配させやがって。おまえ、店に入るなりぶっ倒れたんだぞ。」

え……?」

あぁっ！ あたしの表情に気づいたららしいルカが、言葉を続ける。

「それで、心配した店主のラシユさんがこの部屋を貸して下さいなんだ。ほら、入ったときで迎えてくれた。」

そうだ。その人の言葉を聞いたとたん……!! 昔の記憶がどつと押し寄せてきた。

「なにがあつたんだ? あんなに動揺するなんてお前らしくないぞ?」

……。ルカにはなるべく隠し事をしたくないけど、過去の事を話すのはつらい。

思わず、涙が溢れそうになる。

「まあ、いい。話したくないなら話さなくても。あ、あとな、ラシユさんが今日はこの部屋に泊まっていくと聞いて言ってくたさった。今日は泊まらせてもらうか? もっとも、お前がよければの話だが。」

「ん・・・・・・・・、いいよ。」

「じゃあ、そう言うってくる。あと、晩飯を買ってくるから、ちょっと待ってる。」

「うん・・・・・・・・。」

一人になると、昔の記憶がまたもやよみがえってきた。まだ、あたしがレイ・ディーネではなくただのレイだった頃。毎日が楽しかった。父と母、それに沢山の友人がいた。その頃のあたしは、魔法も使えない、剣技もできない、どこにもいる女の子だった。

なのに・・・・・・・・。

あいつの、あいつのせいで平和だった毎日がすべて終わった。

たった一人の、魔法使いのせいで・・・・・・・・。

あいつは、あたしがヴァンパイアの子孫で、内なる魔力を秘めていることをすぐに見抜いた。

そしてあたしに・・・・・・・・。

自分に従わなかった人を、殺させた。

あたしは必死で抵抗した。

でも、さからうと一瞬で殺されることは眼に見えていた。

だから、眼を盗んで家に帰っては、その頃見つけた書物を読み、そこに記されている祖先のことを知り、どうすれば逃れられるかを考えるだけで精一杯だった。

そんな日々が1年程続いた頃だっただろうか。

その日、あいつはあたしのもつても大切だった、ルークという男の子を、殺させた。

あたしの出した、炎にまかれて死ぬようにと……。

ルークが苦しむ姿を、あいつはあたしに見せた。

ルークは、体中を炎にまかれて、「レイ、助けて……。父さん、母さん……。」といいながら死んでいった。

あたしはそれをただ、涙をぼろぼろ流しながら見ていることしかできなかった。

つらかった。

それまでも大切な人たちを殺すのはつらかった。

でも、死んでいく姿を見るのは初めてで……。

いつそ自分も死にたくなつた。

なんで……？なんで何の罪もない人を殺さなくちゃいけないの……？

だれかにそう言って殴りかかりたかった。

その日、あたしはあいつの目をかいくぐって家に帰った。

そうして、また書物をひっぱりだしてむさぼる様に読んだ。

読んでいるうちに、あることに気がついた。

「光ト闇ノ剣、我ヲ救イシ。」

光と闇の剣という言葉が、頻繁に出てくるのだ。

あたしはすぐに家の裏手にあつた倉に走った。

そこで見つけたのは………？



商業の国 ラーハン2 『レイ』（後書き）

レイの過去が回想という形で次回、明かされます。  
まだルカには話しませんが……。

「あいつ」とは誰なんでしょう……？

## 商業の国 ラーハン3『レイ』

あつた・・・・・・・・。

古びて色あせた木の箱。

あいつの魔力を散々感じてきたあたしには、強い魔力をはっきりと  
感じる事ができた。  
そつと箱を開ける。

はあ・・・・・・・・っ！  
すごい・・・・・・・・！

中に入っていたものは、光り輝く白銀でできた剣と、漆黒の刀身の  
剣との2本だった。

どちらからも、とてつもない魔力を感じる。

今思えば、このときすつでに、あたしには相当な魔力があつたのだ  
と思う。

でない、この双剣に触れた時点で弾き飛ばされていただろう。

これが・・・・・・・・「光と闇の双剣」・・・・・・・・。

あたしは気がつく走りだしていた。

まっすぐに、あいつのもとへ。

何を考えていたのか、思い出せないけれど・・・・・・・・。

ただ、怒りに身を任せて、走っていた。

「ん？ここでなにをしている？もう部屋にいろと言ったはずだが。それになんだ？その剣は。俺に内緒で、どこに行っていたあああっ！！」

「家に……。帰っていた。」

「なんだと？家に？俺に逆らうと、どうなるか分かっているんだろうなあ？」

いつもなら、震え上がるほど怖いのに、脳裏に焼きついているルークの姿が、それをさせなかった。

「おまえを……。殺すの……。ルークと同じ苦しみを、味わってもらおう！！」

そう叫ぶと、あたしはあいつに向かって切りかかる。初めて使う剣だったけれど、自然と体が動いていた。

「はああっ！！」

「なにを……。するっっ！！」

あいつももちろん反撃する。

けれど、怒りにわれを忘れ、恐怖を感じなくなっていたあたしは自分の意思に関係なく、体が動いていた。

あたしは光の剣で切りかかり、体をひねった反動を使ってそのまま

闇の剣であいつのわき腹を切り裂く。そこにすぐさま蹴りをいれ、一気に間合いをつめていく。

「ぐおっ！」

あいつはとつさに腹をかばって、そこに蹴りを受けそのまま崩れ落ちる。

あたしは、あいつを……許さないっ！  
自分でも何をしているのか分からない。

目的はただ一つ、あいつを倒すっ！！

あいつがよろめきながら立ち上がる。

そして、剣を構えると同時に、あたしはあいつの肩を切り裂き、そのまま馬乗りになる。

あいつの顔面を殴った。拳が歯で切れて、血が出るのもかわわなかった。

ただ、怒りに身を任せて、あいつを殴る快感に酔っていた。

はっと我に返ったのは、あいつの弱々しい声だった。

「気は……すんだか？気が済むまで、殴れ……」

あたしは、そのときやっと、自分が涙を流していたことに気がついた。

「もう……いいの……か……？」

「よく……、ないよ。でも……。」

「なんだ？」

あたしが涙を流していたのは、いつの間にかルークの聲がしていたからだった。

『レイ、もう、いいよ……？僕は、あいつの事は恨んでい  
るけど、レイにつらい思い、してほしくないんだ。だから、もう泣  
かないで……。』

「ルークが、もう、いって言うてるから……。」

あたしはそういうと、あいつの上から降りてルークを見た。

『もう、レイに悲しんでほしくないよ……？僕は、レイの  
ことをとっても大切に思ってた。だから、レイにこんなこと、して  
ほしくないんだ。もう、いいんだよ……？』

「本当……？本当に、もういいの？」

『うん。レイはなににも悪くない。だから、悲しい顔しないで……。  
……。」

ごめん……、ルークっ！

「ルーク、本当に、本当にごめんなさい。あなたを、こんな目にあ  
わせちゃった……。」

『いいんだよ。仕方がないことだったんだ。僕は、これからも、レイのそばにいるよ。』

そう言って、ルークは透けた手であたしの涙をそっと拭ってくれた。

優しい、手だった。

商業の国 ラーハン3『レイ』（後書き）

レイの過去です。この「ルカとレイのたびにつき」を書き終わったら番外編として、2人の過去をその当時のまま、書いてみたいと思ってます。

次で、レイの回想は終わります。

商業の国 ラーハン4 『レイ』

「……………イ、レイ。」

え……………？ルーク……………？ルークの声なの……………？

「レイ、大丈夫か？」

目をあけると目の前にルカの顔があつた。

「どうした？嫌な夢でもみたのか。泣いてたぞ。」

そう言われて頬に手をやると、濡れていた。

あたし、いつの間にか眠ってた……………。

ルークの夢を見て、泣いてたんだ……………。

「うん、大丈夫だよ。もう、朝？」

「ああ。昨日買出しから帰ったらおまえ、寝てたんだ。疲れてるみたいだったから、寝かしておいたんだが……………。おまえが泣くなんて、珍しい。あまりにも辛そうだったから起こしたんだ。」

そういうと、ルカはバン（小麦から作られる無発酵のパンのようなもの）と鹿肉の残りを渡してくれた。

「腹、減ってんだろ。」

そう言ったきりもう話さない。きつと何で泣いてたか気になってる



はずなんだけど……。自分もバンと鹿肉を食べている。ルカの、そんな優しさが今のあたしには嬉しかった。

「ありがとう。」

そう言ってあたしはバンと鹿肉を食べる。

おいしい……！！

ルークも、バン好きだったな……。よく二人で食べたっけ。

ルークは料理上手だったから、いろいろ教えてもらった……。

ルークの事を考えてると、夢の続きでまた泣きそうになる。

ルークの事以来、人前では泣かないと決めていたのにな。

ルカの前だとい、気が緩む。

ルカはルークによく似ている。優しい薄茶色の眼も、心遣いも……。

今はまだ、ルークの事は話せないけれど……。

「ごちそうさま。」

「ごちそうさまっ おいしかったよ。……。ありがとうね。」

「ん。」

ありがとう……。ルカ。

ルークを失くしてから、ずっとつらかった。

毎日、泣いてた。

ルークもあたしの聞き耳の才に気づいて、よく現れてくれた。

でも………。つらいには変わりなかった。

あたしは、しばらくすると故郷の人々の冷たい目に気が付いた。そう………。あたしは村の人たちにとっては、あいつの手先になった、憎くて、憎くてたまらない人だった。

あたしは、村にはいられなくなった。

村には、大切な友人や家族がいたから、村を出るのはつらかった。でも………。村の人たちの気持ちを考えたら、村にはいられなかった。

そして、あたしは村を出た。  
見送ってくれる人は、誰もいなかった。

村を出て、一年たった頃だっただろうか。  
同じく旅をしていた、ルカに出会った。  
あたしたちは、目的地が一緒だったから、一緒に旅をした。  
次の国では別れるつもりだった。

けれど、旅をしていて気が付いた。  
ルカは、今心を失くしてる………。つらい、つらい過去のせいで自分でも気付かないうちに、心を失ってる。

この人に、心を取り戻して欲しい。

そう思ったのは、ルークに似ていたからなのかな………。？それとも……。

ルカを元氣付けようと、あたしはつらい心を押し殺して、必死に明るく振舞った。

最初は心を取り戻してはくれなかった。

でも、次第に……。少しずつ、ルカの体に心が戻っていくのが分かった。

あたしの心も……。

そうして、あたしとルカは二人で旅を始めた。

「ルカ、もう大丈夫だよっ！出かけようっ」

商業の国 ラーハン4『レイ』（後書き）

ルカとレイの出会いです。

次からは通常通り、二人で旅していきます。

商業の国 ラーハン5『レイ』

「ありがとうございます。」

「あ……、ありがとうございますっ！」

あたしはペコッと頭を下げる。

「いいんだっ、気に、しないで下さいっ。」

この話し方。

あたしのいた村の地域の人が、共通語であるレナル語を話そうとするとしてもこうなってしまうのだ。

語尾を強めて言うてしまう。

あたしも村を出た頃はこうだった。でも、この言葉で話すたびに、村での楽しかった思い出とあの忌まわしい記憶が蘇ってものすごくつらかった。

だからあたしは必死で訓練して、皆と同じように話せるようになった。

「それでは……。」

「お世話になりましたっ！」

「ねえ、ルカ。ここでの仕事どうしよっ？」

「その事なんだが……。」

そう言つてルカが手渡してきたのは、一枚の破れかけた紙だった。用心棒求む。ここ数ヶ月、竜を召喚したモノが暴れて困つておる。腕の立つ方、封印してください。見事封印されし者には、報奨金500カロン（薬50万円）差し上げる。

「いいじゃんつ、これ。竜は……、殺さなくてもいいんでしょ……?」

「ああ、もちろん。封印するだけだ」

何の罪もない竜を殺すというのなら、あたしは断固としていくつもりはなかった。  
でも……。

「ならよかつたつ！あたし一回竜見てみたかつたんだ。」

「今から頼みに行つてみるか？」

「うんつ！行こつ！」

「すみません。」

「あのつ、この紙見てきたんですけど、あたしたちにやらせてくださいっ！」

「え……、ええ。お願いいたします。」

店の主人は少し驚いたようだったが、どうやら雇つてくれるようだ。透き通るような緑色の眼が、とても優しそうな男の人。

すぐに奥の部屋に通された。

こじんまりとじていて、落ち着く……………。

「それで、どついでしょっ？」

「実は、ここ数ヶ月一週間おきに決まった男がやってきて……………」

商業の国 ラーハン5『レイ』（後書き）

今回、ちょっといつもより短いです。

次回、竜を召喚できる男との戦い&主人の話です。



## 商業の国 ラーハン6 『レイ』

その男は濃い茶色の髪に漆黒の瞳、店に現れるときは決まって異国風の薄い灰色の上着と袴を着ていたらしい。

店に現れるようになったのは、約4ヶ月ほど前。最初は一人でワインなどを黙って飲んでいたが、一人の客が「一人かよ、おいおい。寂しい奴だなあ！そう思わないか？」と言って話しかけた途端に……。

「人が豹変した様に剣を振り回して……………」

話しかけた客の喉を切り裂いてしまったのだそうだ。

そして、おもむろに呪文を唱え出し……………」

「竜を、召喚したんです。そのあと、『また来よう。この酒はなかなか美味かった。』と言って帰っていきました。そのときはなんとなくなかったんですが……………」

その日から一週間後。

また、その男は現れた。今度は酒を飲み終わると黙って立ち去ろうとしたので、店の主人が声をかけるとまたもや竜を召喚し……………」

「竜を暴れさせて、店をめちゃめちゃにしてみました。店本体は大丈夫だったのですが、中はもう……………。それでも、頑張って続けていたんですが、また大体一週間後にその男が来て前と同じように……………。それから、ずっとです……………。あの男を……………。なんとかしてもらえませんか。」

「ええ。その男を倒して、竜は再び封印します。竜を殺すことは絶対にしません。それでもいいですか？」

「はい、お願いします。」

「大丈夫ですっ！あたしたち、頑張りますから」

そのあと、夜になるまであたしとルカはゆっくり休ませてもらうことにした。

「ねえ、ルカ？」

「なんだ？」

「一つ、気になることがあるの。なんで、その男は一回目の時竜を召喚したのかな？別に必要ないと思うの。次来たときにしてもよかったんじゃないかな。それに竜を召喚できるほどの魔力が、よくあったよね……。」

「それは俺も思っていた。竜を召喚するほどなら、相当な魔力を持っているはずだから……。」

そう。竜を召喚するとすると、並大抵の魔力では耐えられずに逆に竜の魔力に押されて死んでしまう。そのくらいのことなのだ。それをその男は……なぜ？なぜここで召喚したの？どうせなら自分の魔力が一番高まる場所であればいいのに。それも、人によって違うけど、自分の魔力が一番高まる時間に。不思議な事が、多すぎる……。

夜。あたしは戦闘時の服に着替える。昨日買った服がいきなり破れたら、悲しいし。それになるべく動きやすい方がヴァンパイアの血を引くあたしの運動能力をめいっぱい使える。あたしの戦闘服は黒の短いワンピース。これなら思いっきり動くことができる。光と闇ノ双剣を出して……。

同じく戦闘服に着替えたルカに声をかける。

「ルカ、行こうっ！」

あたしとルカはなるべく気配と殺気を消して、それぞれ壁にもたれ掛かる。

ガタッ。

「ワイン。一番高いやつだ。」

「は、はいっ！」

沈黙が支配している。聞こえるのは、ただあいつがワインを器に注ぎ飲む音だけだ。誰も、何も言おうとも、動こうともしない。

ガタッ。

あいつが席を立つ。と、すかさずルカが

「ちょっと待て。」

「ああ？なんか用か？このガキが。」

「ああ。なぜ金を払わない。」

「なぜ？払う必要がないからだ。世界最強のこの俺はなあっ！」

そうあいつが叫ぶと、どこからか竜が出現した。

大きい……！！頭だけで、あたしの全身くらいある。

「お前が世界最強だと？自惚れるのもいい加減にしろ。」

そう言うとルカが水ノ剣を一振りし、あいつの腹を切り裂く。

よし、あたしもっ！

商業の国 ラーハン6『レイ』（後書き）

ここんとこ、なかなか更新できず……。がんばります（汗）  
次は全部戦いシーンになる予定です。

## 商業の国 ラーハンフ『レイ』

「このくらいの攻撃で俺がやられると思うかあ？んなわけねーだろっ！いけっ、ライっ！あいつを炎で焼き尽くすんだ！！」

あの竜、炎の属性か……。あたしの魔法も治癒魔法を除いたら、大体が炎の魔法だ。竜があそこまで従順なことを思うと……。あいつも炎の属性なんだろう。

てことは、あたしの魔法じゃ大したダメージが与えられない。光と闇ノ双剣で戦うしかないな……。

「水ヨ、我ヲ守リシ盾トナレ！アリーナ・レイトツ！ 水よ、凍れっ！」

ルカの放ったシールドがライという竜の炎から守ってくれる……。って言うてもあたしはそんなにダメージ受けないんだけど……。

あたしも行くか……。

「はああああっ！」

あいつに一気に切りかかる。あいつもとっさに自分の剣で受け止める。

キィィンという金属音とともに、互いの剣がぶつかった。

こいつ……。魔力が人間離れしてる。普通の人間が持つ剣が、あたしの持つ光ノ剣に耐えられるはずがない。まさか、こいつも……。あたしやルカと同じように人間以外の種族の血を

引いているんじゃない………？

考えている暇はない。あたしは左手に持った闇ノ剣で、あいつのがら空きの腹に切りかかっていった。

ううっ！頬に鮮血が飛び散った。

「こんな怪我など、かすり傷に等しい。」

そうあいつが呟くと、腹にできた傷がすうっと消えていった。  
治癒魔法………。

仕方ない………。

「光ヨ、我が敵ヲ切り裂キシ刃トナレツ！」

その途端、あたしの右手にある光ノ剣から一筋の光がほとばしった。  
光が刃となってあいつの肩を切り裂く。

「闇ヨ、我が敵ノ魔力ヲ吸イ取レツ！」

あいつの傷口から真紅の炎の魔力のオーラが一気にあたしの体に流れ込んでくるのが分かる。  
今なら………。

「ルカっ！」

「ああ、よけてろっ！水ヨ、我が敵ヲ貫キシ刃トナレツ！」

水ノ剣から放たれた水が、すごい勢いであいつに向かっていく。

「レーシード・メルツ！ 炎よ、盾となれ！」

あいつも自ら炎の盾を作り出して、必死の抵抗を試みるが……

魔族の血を引くルカの魔力は、元々の才能もあって他の人とは比べ物にならない。

あいつの盾をいとも簡単に突き破った。

「ぐあああつ！」

あいつの腹に大きな穴が開く。竜は、主人の命令がなく、ただその場につっ立っている。竜はこちらから仕掛けない限り、決して向かってはこない。だからあたしとルカはあの男ばかりを攻撃していたんだ。

あとは、この竜を封印してやるだけだ……。



商業の国 ラーハンフ『レイ』（後書き）

ずっと書きたかった戦闘シーンです^^

次回、レイがラーハンに着く前に聞いた声の正体が分かるかも・・・

・・・、ですw

商業の国 『ラーハン』 8 レイ

あいつ 敵との戦いを終えて、あたしは初めて竜の姿をじっくり見た。

鱗がぱつと見は真紅に見えるけど、よく見ると店のカンテラのあかりに照らされて複雑に輝いている。きれい……。

「ルカ、封印しようか。」

「ああ。でもその前に、どうしてこんな奴に従っていたんだ？それに、もともと封印されていたのか？」

「言われてみれば……。」

「聞き耳、開いてみたらどうだ？」

よし。

あたしは心を静める。静かな、森の中の湖面のように……。

『あなたの……名前は？』

『シエイル・レイト……。』

炎を……つかさどるモノ？

『あなたの主人の名前は、わかる？』

『レイル……』

あたしは質問を続ける。

『あなたは、レイルと会うまでどうしていたの？』

『ただ……真つ暗な場所にいた。レイルが……自由にしてくれた。』

そっか……。どうしよう。封印したら、また真つ暗な場所にいることになっちゃう……。

「レイ？何か分かったか？」

「どうしようか？もう一回封印するのもかわいそっだしな……」

「そっだな……。そのー、えー、シエイルに聞いてみたらどうだ？どうしたいかってことを。」

そっだよね……。一番はシエイルの意思。

商業の国 『ラーハン』 8 レイ（後書き）

2ヶ月ぶりです。色々ありまして……（汗）  
また暇を見つけては書いていきますね。

今回はめっちゃ短いんで、次回がんばります）・・・（

商業の国 ラーハン9 『レイ』

『シエイル、あなたはどうしたいの？』

『わからない……………でも、もうあの闇に戻りたくない……………』

「もう、封印されるのは嫌だって。どうしよう？」

「そうだな……………」

そいつってルカは考え込んでしまった。

『レイルはもう死んだの。あなたは自由なの。だから、どこにでも行く事ができる。』

『一人は、もう嫌だ。誰かと、いっしょにいたい……………』

そうだよね、ずっと闇のなかに一人にいるなんて嫌だよね。

でも、どうすればいいのかわからない……………。

シエイルの気持ちは大切にしたいけど……………。

この世界にドラゴンと一緒に暮らしていけるひとなんているの？

わかんないよ……………！

「あ、そうだ！」

急にルカが大きな声を出した。

「どうしたの？」

「いや、前に聞いた事があるんだが、北の大陸には竜の住む谷があるそうさ。そこならシェイルも寂しくないし、暮らしていけるんじゃないか？」

商業の国 ラーハン9 『レイ』（後書き）

4ヶ月ぶりです・・・。

一度はこのまま完結させてしまおうかともおもったのですが、ルカとレイをしなければならなかった、この世界から無理やり消し去りたくなかったのでゆっくりですが続けていききたいと思います。

また、暇を見ては投稿していきます。

商業の国 ラーハン10 『レイ』

そこならシェイルも生きていける!!

「ルカ、そこにシェイルを連れて行こうよ!それなら、シェイルも生きていける!!」

「あ……………ああ……………」

「どうかしたの?」

ルカが戸惑いながら先を続けた。

「いや、あることはあるんだが、いったい誰がそこまでシェイルを連れて行くんだ?」

あ……………。

その谷があるといわれるのは北の大陸。

あたしたちがいるのは南の大陸……………。

遠すぎて、とてもシェイルと一緒になどいけない。

どうしよう、せっかくいい方法が見つかったと思ったのに……………  
……………!!

不安になると酒場の酒の匂いやレイルの血の匂いがやけに鼻につく。



そのまましばらく、みんな考え込んでしまった。

『レ………イ、シエイル、ひとりでいける………』

え？

『シエイル達、仲間の場所………わかる………』

はやくいってよ……！

商業の国 ラーハン10 『レイ』 (後書き)

はい、短いですが、すみませんっ!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2948q/>

---

ルカとレイのたびにつき

2011年10月8日15時40分発行